
星屑の街

fuki

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑の街

【Nコード】

N1585Z

【作者名】

fuki

【あらすじ】

もそもそと書いた短編集です。きつと続かないだろうなという意識の元の単なるネタ投下です。話しは繋がってないことが多い。ばつらばらに更新する場所。育つことないバラ撒かれた種が辿り着く先、星屑の街。

とかいいつつ、異次元に迷い込んだあげく『成長』を奪われ五歳くらいの子どもになっちゃった女性とその保護者が異世界を渡り歩いて『流れ星』をつくるお話。童話やらなんやらのパロに走る。

星屑の街、案内人との出逢い（前書き）

星屑の街、案内人が参りますので暫くお待ちください。

星屑の街、案内人との出逢い

瞳を開けるとそこは、仄暗かった。

私は大きな光輝く大きな川の上に佇んでいた。

果てしなく空が遠く信じられないほど川が近い。

黄の光、赤の光、緑の光が気儘に混ざり合ってシャボン玉のように滑らかに溶け合っては色鮮やかに尾を引いて光芒を描いていき、光輝な川の中、金の魚が悠然と水紋を揺らし私の足下を抜けていった。

どこまでも深い深い光の淵。

闇は底なく、光も底ない。ただそこに広がるだけだ。深淵なる光と闇。

「・・・ああ、」

遠くに見えるのはなんだろうか。光の雫がぽつぽつと落ちて、私は天を見上げた。魚を誘う篝火。精霊に備える灯火。光雨。

どこかで音色が聞こえる。

嗤う匂う泣く蔑む瞋る笑む囁る嬉し惑う祈る包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快くひたひたひたひたと。

見上げたさきの暗闇のなか捻れた朱い月に鳳凰が嗤った。ガラクタばかりの宝箱が如く不思議な世界。チクタクと時計を持った兎が忙しそうに横切って、足下を泳ぐ蛙がぷくぷくと泡を吐き出した。いまだにふる雫の向こう。歪んだ浮船に降り立った三叉鴉が光を囁り、黒猫がはんなりと舞う蝶を追って光の川を駆けた。

ふりつづく光の雫がぼつぼつり。魚を誘う篝火。精霊に備える
灯火。光雨。嗤う匂う泣く蔑む瞑る笑む啜る嬉し惑う祈る。光に攫
われてしまうと魂が点滅する。包む怒り紡ぐ啼く誇し唄う叫ぶ快く。
赤黄青光金の魚朱い月鳳凰時計兎蛙三叉鴉黒猫蝶光光雫雨が歪み捻
れて聞こえるのはもはや、ひたひたひたひたひたひた。

「星露にあたるのは良くないよ」

降り注ぐ光のまにまに。玉響に、音が絶えて。翳されたのは鳶
色の一つの古びた番傘。和紙を滑って雫が瞳を見開いた私を避けて
垂落する。ざわついた聞き苦しい音たちはずっと消えて。柔らかな
音が耳朵を震わせた。

美しく見えてもそれは全ての終わり、絶えた望み、諦めの雫。
ここは、そんなモノの辿り着く終着点。ごみのように打ち捨てられ
たモノがただ鈍く光る星屑の街。星屑たちは、呑み込むのを待つて
いる。

ここで独り光の渦に呑み込まれるのを永遠と待つか、それか今ここ
で俺に捕らわれるか。

「それでも構わないのなら、着いておいで」

そっと差し出された掌に重なるために伸ばした手が、大きな掌に触

れて。私はその温もりに鮮やかに攫われた。

（意識がなくなる瞬間、ぱりんとひび割れる音がした。）

星屑の街、案内人との出逢い（後書き）

案内人、星屑の街より一人ご案内。これより短し様々な世界へとお連れ致します。

案内人との関係について1

ばたばたと短い足で廊下を走り、ようやく辿り着いた部屋の前で柔らかにぶにぶにした手を伸ばす。紅葉の手とはまさしくこのような手なのだろうと思いつつも必死にドアノブに伸ばすが掠ることさえもできなくてム、と口をへの字に結んだ。こうなったら。

「・・・よし！」

ぐ、と気合いを入れてドアノブを睨み上げつつ背伸びをした。が、それでも届かなかった。小さい足がぶるぶるさせて諦め悪く必死に扉に手をつけて背伸びをしたりぴょんぴょん飛び跳ねたりしたが遙か遠くにある回転式のドアノブは微動だにしなかった。

それでも諦めず幼子が必死になっている姿はそりゃあ微笑ましい光景だろうよと私の後ろを通りながら笑った他の案内人やトラベラーたちに内心舌打ちしつつ振り返って「べーっ！」と舌を突き出すがそれすらも微笑ましいのか飴を押しつけられた。最初は投げつけ返すぞと息巻いていたが、掌の美味しそうな飴に罪はない。

じいと飴を見下ろして次いでばあっと笑った私に彼女たちは眉尻を下げて頭を撫でて颯爽と去って行った。ふむ、きつと仕事なのだろう。昼から大変なことだ。ってこんなことをしてる場合じゃなくて！ポツケに飴を突っ込んでさっきの不動の扉を小さな手でぽすぽすと叩いた。

「あーんなーいにーんーあーけーてー！・・・つかあける」

「はいはい・・・、っと、おはよイチル」

「おはよじゃないよ、もうお昼だぞ」

がちやりと扉が開いて私はすぐにその小さな扉に身を滑り込ませた。
「イチル、挟まれたら危ないでしょ」と咎めてくるのは私ことイチルの案内人のノアールだ。名前はないのか、と以前聞いたら案内人だから決まった名前はないよと言われたから勝手につけた。

よいしょ、とノアールにふわっと持ち上げられた私は習慣のように咄嗟にノアールの首に腕を回してバランスを保ち肩口に頬をあててノアールを見上げる。と、ノアールはいつも眼をあわせて柔らかく笑ってくれるのだ。

抱っこされることも勿論だがノアールの破壊力がある笑顔の間近さに慣れるのには大分時間がかかったがもう慣れた。なぜいっぱしの二十歳の女がこうなったのかというのはもう説明してもしたりないくらいだ。

そんなボンキュッボンだったワンダフォーな私の姿はいま端から見て5歳くらいの子もだ。かつての栄光はどこに、と短い手足と寸胴な身体を見下ろして泣き崩れていたらノアールが「前と別に変わらないけどね」と意地悪をいつてきたのはもう昔のことだ。今思い出しても腹が立つ。私はねちっこいのだ。

ふつつつとわき上がった怒りに目の前の茶色の髪の毛を引っ張ると欠伸を漏らしていたノアールはぎょつとしてイテテテと慌てて私の小さな手を追い払った。

ノアールの青い色の眼に涙が浮かんでる。ふふん、いいざまなのだ！とこっそりほくそ笑んだイチルを目敏いノアールが見過ごすことはなく仕返しとイチルの黒髪をぐしゃぐしゃに撫ぜ回した。

「ぐわぐわするから止めるのだノアール！」

「あはははは、細い髪だからよく絡まるねー」

首がぐにゃんぐにゃんと撫ぜる手に振り回されて眼がくるくるする。最初は盛大に反発していたイチルを楽しんでいたノアールだったがぐったりと凭れてきた子どもに慌てて手を止めて顔を覗き込むと顔を青くしたイチルと瞳があった。

「ごめんごめん」

「うつぶ、ふざけるのも良いかげんにしろこのヤロー。お昼ごはんを食べたあとだったらあやうくりバースするところだったぞ」

「そっか、うん。心からリバースしてくれなくてよかった」

「しね」

「ふげっ」

俺の服汚れちゃうからと爽やかな笑みを浮かべたノアールの顎下に頭突きを食らわせ、ばたばたと足をばたつかせ離せアピールをする

とパツと離された手のおかげで地面に足をつけたイチルは腕をくんでぷいとそっぽを向いた。

一瞬『ヤバイ!』と思ったが今のは別に私は悪くない。だけど、やつぱりちよつと不安で顎を押さえて唸ってるノアールをちらりと見上げた。彼は私の恩人なのにと。だけどそれでもわざわざノアールのためにここまで来たのに。小さな手を握ってそっぽを向いたまま口を開いた。

「お、おこられても今のはわたしはわるくないもん!」

ぺいつと戦きつつ吐き出すとノアールはようやく顎から手を放し私と同じ視線になるようにしゃがみ込んだ。けれどそっぽを向き続けるイチルとノアールの視線は交錯しない。

理由もなく一つ零した嘆息に小さくイチルが震えたのに気がついたノアールは仕方ないというように苦笑いを浮かべてそつと、ぼさついた黒髪に手を伸ばし撫でつけると、頑なにそっぽを向いていた視線がそろそろと下に向けられて次いで懲りたように交錯した。すぐさまノアールは優しく笑ってみせる。

「今のは俺が全面的に悪かったし怒ってないから大丈夫。それよりもう昼ならさつさと食べに行こうよ、ね?」

お昼もすっぱかさないように、わざわざ俺をお越しに来てくれたん

でしょ？

続けたノアールにイチルがその通りなのだと、こくんと頷くとノアールは柔らかに笑った。その青の瞳に怒りの色はない。私はほっと安堵の息をついた。

試しにこのねぼすけさんめと嫌味を言ってみたが、ノアールは気にもとめない様子でそうだねとやっぱり笑ったまま頷いて立ち上がった。影が翳る。でも、この影は怖くない。だって、

「食いつばぐれないようにしなきゃね、ほら行くよイチル」
「うん！」

星屑の街で差し出された掌がまたイチルに伸びたから。

思わず破顔してその温かい掌を握りかえした。星屑の街で独りでいた私を攫ってくれたこの温かい掌がどうしたって大好きでしかないのだ。掌から伝わる温もりにふにやりと頬を緩めると足が地面を離れて。ぎゅうつと抱きしめられた。

「ノアールわたしべつにつかれてないから歩いていけるよ？」

「俺が抱っこしたくなっただけ。だからイチルさんは大人しく運ばれてください。分かったかな？」

「はいせんせー！」

一瞬、きょとんとしてしまった私を覗き込んだノアールの瞳が悪戯っ子のように煌めいていて。私も元気の良い声で返事をして、そしてまた二人で弾かれるようにけらけらと笑って廊下に出た。

心地よい揺れと、服を伝わる温かさ。そしてほのぼのとした雰囲気のままイチルとノアールは食堂へ向かっていった。

案内人との関係について1（後書き）

案内人とトラベラーの一日、朝から昼までをご説明致しました。

案内人との関係について2

ノアールに抱っこされたまま食堂に連れて行かれた私は周りからの微笑ましい視線にびっしびしに突きさされた。ええい見るな！私はパンダではないのだ！

むむと睨み付けるが皆一様にして頭を撫でて行く。今はお腹がすいているから許してやる。反抗するきも起きぬのだ。

イチルは、んしょつとノアールの膝の上で身体を捻って座り直す。なぜなら机は大人用に作られていて、今のイチルでは椅子に座っても頭が机から出ないからだ。

ノアールが一回私のお腹に腕を回してずり落ちないようにしてくれた。前に良いとしこいた女がなんでこんな屈辱を受けねばならぬとノアールにくつてかかったが爽やかな一笑に異議が伏せられた。その爽やかな笑みに異議あり。

かちゃ、とスプーンがお皿に擦れる音がして机の上を見ると目の前には黄色いオムライスとサラダとフランスパンが平らな皿に盛りつけられていてイチルは、ぱあっと瞳を輝かせてすぐさま小さなスプーンを手を取った。

戦闘態勢完了なのだぞとノアールを見上げると、ふわつと笑ったノアールは手を伸ばしそのオムライスを小さなお皿に寄せて私が届く所に置いてくれた。

オムライスの断面からとろとろな卵とトマト色のご飯が顔を覗かせ、

恥ずかしいと顔を隠すみたいに湯気がぼわんとイチルの鼻をくすぐった。美味しそうとスプーンを突っ込んで口の中に放り込み広がった味にゆるりと頬を緩ませる。幸せだ。

「ノアール！オムライス美味しいぞ」

「そうだね、はいイチルあーん」

口元につけてこられたノアールの手に私は警戒することなく、ぱかっと口を開いて受け入れた。小さい子の顎でも噛み切れる柔らかめのパンだ。

「てめえも相変わらずだなノアール」

もふもふと咀嚼していた二人が声がした方に顔をあげると紺色のスウェットを着たヤンキーがこっちに近づいてきた。眉なしで釣り目で細マツチヨで金髪の頭に刈り込みいれてるからヤンキーって勝手に呼んでいるのだが、案内人ガンドック通称ヤンキーだ。

そのヤンキーが、がたと前の空いている席に腰掛ける。「ようイチル」とガンドックが挨拶してきたから私も「よっ」と頷いた。

ごくんとパンを飲み込むとノアールがすかさず、まだパンいる？と聞いてきたからふるふると首を振ってオムライスに突き刺していたスプーンを口に入れた。おいしい！

「あーああ、ったく案内人もついにロリコン化かア？」

「うっさいな、羨ましいなら素直にそういいなよ。ねー、イチル」

急に自分の名前がでて反射的にぱつと顔をあげたが、オムライスばかりに気を取られて全く持って会話を覚えてない。むむ、そんな呆れたような顔をするなガンドック！私だってやるときはやるのだぞ。ぐつと眉間に皺を寄せ神妙そうにスプーン片手にこっくりと頷くと、ノアールがぶつと噴き出し笑いだした。なにごとだ！ノアールの膝の上に座ってるから振動が直に伝わってお、おちてしまっ！慌てて両手を伸ばし突っ張る。

「あははっ、はは！ああ、イチルごめんごめんつぶっ」

ぱつと落ちないように机に両手を伸ばし突っ張ったイチルにすぐさまノアールがお腹に手を回し引っ張りあげる。

お皿に盛られた少ない量のオムライスでも五歳児になってしまった私の空腹だった胃を満たすには充分だった。背中にノアールのお腹がくつついてあったかくてぬくぬくする。

もたれたくて仕方がなかったけど、小刻みな揺れは我慢し難い。でも、なんで急に笑いだしたのだ？

そんな不思議にきょとんとノアールを見上げてみるけどまだ笑い続けていたから答えが貰えそうにない。ならば、と前に座ってるガンドックを見てもガンドックはぼかんとして私を見ていた。眉毛がない。どうしたのだ刈り込み。

二人に無視されたような形にイチルがぶうと頬を膨らませるとようやくガンドックが動いた。額に手を当てる。指の間から見える金色

の眼は、疑心に満ち満ちてイチルを見据えていた。

「なア、こいつ本気でもと二十歳の女なんだよな？見えねえよ、精神的にもろガキじゃねえか」

「ガキじゃないもんうるさいだまれヤンキー」

「ほれみる、ガキだ」

「ガキって言ったほうがガキなんだぞ！」

「まあまあ、可愛いから良いじゃん。それにこれも星屑の街にいたせいなんだしイチルのせいじゃないよ」

「だっつってもこいつが盗られたのは単に体の成長だろうが」

「体に精神が引っ張られてる可能性だってなきにしもあらずでしょう？」

「わたしは見かけは子どもずのうは大人なのだ！」

売り言葉に買い言葉と勢いづいて身を乗り出した私のお腹に回された腕がほんのりと力が入る。星屑の街。あの光の川があつた所だ。

あそこに長くいると何かを奪われるらしく、私はもののみごとガン Dock のいう『成長』を奪われた。じゃあ一生小さいままなのか？という疑問が浮かぶがどうやら『流れ星』を作ると奪われたものが少しずつ返ってくるらしい。

流れ星に三回お願いすればいいのか、と聞いたらノアールはそうかもねと笑った。

それよりどうしたガン Dock。顔色が悪いぞ。体調が芳しくないのではないか？さっきノアールが笑った気配がしたがまさかそれでは

あるまい。

ノアールの笑顔は優しくてあつたかくて眠たくなるようなそんなもののだから。

ぽわんとした気持ちにゆられイチルがこてんと頭をノアールの胸に預けると大好きな掌が頭におりて。ふにやと笑った。がすぐさまはつとする。

ほのぼのした雰囲気居づらかったのかなんのかは知らないがガンドックがかたりと立ち上がったからだ。

ノアールが不機嫌そうにガンドックを睨めつけるが、鼻であしらわれた。

「^{シャロン}神官から伝言だ。仕事を振り分けるから来いだよ」

くるりと背を向け食堂をだらだらと出て行ったガンドックを見送って私はノアールを見上げた。ノアールの綺麗な青色の眼も私を見下ろしている。^{シャロン}神官からの呼び出しということは・・・、

くるつと膝の上で方向転換をして

「はつしごとー!」

「お仕事デビューだね」

ぎゅっとノアールに抱きついた。

案内人との関係について3

わくわくどきどき。ハンカチとティッシュもきちんと持ったし鞆の中に着替えも入れた。よし！

「忘れ物はない？」

「だいじょうぶ！」

元気よく返事をしながら、よいしょとリュックサックを背負ってくるとノアールをふりかえるとノアールは片手を壁についてブーツに足を通していた所だった。先に廊下に飛び出したいくらいイチルは頬を赤らめてわくわくしていた。

実際ぴよんぴよんと届かないのは分かっているけどノブに手を伸ばしてしまいうくらいに心は、はやっていた。とたんにぽすっ音が生じた。

頭になにかが被せられてきょとんと手にとって見ると、まるで花弁みたいに鍔が大きい帽子だった。ここにガンドックがいたらきつとピクニックにでも行く気なのかと突っ込んでいただろう。

「よし、いこっか」

笑顔と一緒に差し伸べられた手をとって、私たちは部屋をあとにした。

とことことノアールの指先二本をぎゅ、と握り締めつつ歩くと女の案内人やトラベラーがそのちまっこい姿に母性本能がくすぐられるのかチヨコやら飴やらを手にしたせてくれた。

「あら、初仕事なの？頑張ってね」とにこにこ笑って頭を撫でて去って行く。色んな人に激励とお菓子をもらいつつノアールと仕事部屋の一つの扉をくぐってイチルは部屋の惨状に思わずぽかんと口を開いて眼を見開いた。

黒い眼に映るのはただただ散乱した紙の束だ。

部屋の脇に並べられた書棚にはこれでもかと本や紙が無造作に詰め込まれて、彼方此方に書棚に入り切らなかつただろう本がジェンガみたいに積み上げられていた。いつか倒壊すると思う。

ちろ、と近い足元を見ても広げられたままの本や紙が散らばっていて足の踏み場もない。

まるで書物の海だ。どこを踏んで進めばよいか分からぬと二の足を踏んでノアールを見上げると、ノアールはこの惨状を歯牙にもかけず踏み進めた。手が繋がれてるためイチルも必然的に引っ張られてぐしゃりと靴底が本を踏み付けて超えた。

途端に鼻をつく古めかしい紙のにおい。図書館の、奥の奥にぽつんとある古めかしい不思議なおい。

本とか紙とか踏んで良いのかという良心が渦巻いたためちよっぴり抵抗してみた。ほんのちよっぴりだけど。そんな小さな抵抗にノアールはもちろん気がつかずそのまま進み奥の机の影を覗き込み、盛大に溜息をついた。私の身長では全く見えない。

一体なにがあるのだ。むむっとしてると、ノアールの視線の先のかなにかが動いたからイチルにも見えた。もぞもぞと動いたその物体が、腰掛けていた椅子から立ち上がる。さらりと短い白髪が揺れた。

おじいさんかと思っていたら吃驚するくらい若かった。多分、ノアールと同じくらいかな、どうだろうな。神官^{シャロン}つていつてたけど、なるほど確かに神に仕えるのが相応しいくらいに綺麗な顔だった。

瞬きが無かったら美術館に石膏として置いてあっても不思議じゃないそんな顔。世の中の女性が騒ぎ立てそうな感じだなあととぼんやり思ったけど付き合いたいとか愛を囁いて欲しいとかまでイチルは思わなかった。私は面食いじゃないのだ。

しかも、五歳まで年齢が退行してしまっている。五歳に愛を囁く云々とかただのロリコンだろ。うわあ、こんな綺麗な人がロリコンとか想像したくないのだぞ。

じろじろと青年を観察あと本に視線を向けた。青年の片手に収まっている本は小さな本だ。こんな人はどんなお話読むのかなと、首を傾けたイチルに白髪の青年は、さきほどのイチルを真似たようにじいいいと赤い瞳でイチルを見下ろす。うひっ。

「ちょっとシャロンそんなガン見しないでよ怖がつてるじゃん」

「………小さいな」

「ぴぎゃっ」

予備動作なく急に伸びた手に心底驚いて思わず変な声をあげてしまった。

ぼす、と乗せられた手はすぐさま離れていき、ふむ、と白髪青年シヤロンは考え込んで掌をぼうつと見てはこくんと頷いた。全く持つてイチルには意味が理解できない。

訳が分からなかったきゅ、と握り締めていたノアールの指がまるで大丈夫だよといったているようで。私も握りかえした。ありがとう、だいじょーぶ。ちよつとびっくりしたただけだから。

「初仕事だったな。・・・これでどうだ」

ぱつと渡された紙をノアールが受け取ってすぐさま眼を通す。私も背伸びして見ようとしたけど見えなかった。残念。がっくりと肩を落としたイチルをシヤロンがじつと見つめる。ぴぎゃ。

「流星が見れるといいな」

なんでこつちを見るときに瞬きしないのだシヤロンとやら。怖いのだ。

イチルにとって綺麗な顔で瞬きされず観察されるのは一種のホラー感覚であったから、そう言つて興味がなさそうにシヤロンの視線が手元の本へ向かったことにほつと胸を撫で下ろした。

「イチル、俺がいつていうまで決して瞳を開いちゃダメだからね」

大きな古い扉の前でノアールの掌がイチルの両瞳を覆つて。従うように閉じられた目蓋の裏で、捻れた朱い月がどうしてか浮かんでは消えた。

で、どうして目を開けた瞬間にこんなに大きな、

「うみが見えるのぉおおー！！！」

あああああ！と私は膝をついて晴れ渡る綺麗な空を反射する海へと叫んだ。

人魚姫 1

太陽も射し込まない深い深い綺麗な海の底で、女は長い髪をそのままにくるりと回って光が揺らめく上へと目指す。昇ればのぼるほど、消え入りそうな淡い水色の光が海を照らしている。

足があるはずの所は、魚の尾びれで。滑らかに水を蹴る。

だが不思議なことではない。なぜなら彼女はこの海を支配する人魚王の末娘であり、彼女自身も大勢居る姉と同様、人魚姫と呼ばれていたからだ。

女はふと眉根をよせ海の空を仰ぎ見るが、遊んでくれと身体をこすりつけてきたイルカに気が行った。けれども、その逸らした一瞬で女はどうやら海がぐずり始めたことに気がついた。伊達に人魚王の娘ではないし、海が気分屋なのは海の底で生きてきた以上重々理解していたし普段は気にもとめないのに。どうしてだろう。

「・・・不思議ね。今日は何だか上にいかなきゃいけないような、そんな気持ちが溢れて止まらないのよ」

「きゅう？」

「ふふ、分からないわよね」

美しい声で紡がれた言葉が全くわからないとでもいうように、きょとんと首を傾けたイルカに苦笑を向けて女は、また上へと視線をあげた。海と違って本当に果てがない空へと想いを馳せて。

海が荒れる、荒れる。

嗤う風に離し立てられて、海が泣く。唸り声すらあげんばかりに荒れて荒れて荒れて、さっきまで射し込んでいた淡いいろの陽光もまぜつかえしてぐちゃぐちゃに溶けてきえさせたのに

そんなとき、真暗な海の空から。きらきらと射した光に私はとつさに手を伸ばして。腕の中にその光を受け止めた。金色を纏った彼の目蓋は苦しげに閉じられていて、女は直ぐさま海と空の境界線に急いだ。

陸と海の境界線。私と彼の境界線。もっと早くに気がついていれば良ろしかったのに。そんなことをいまさら思っても結局私はあの日の光に手を伸ばすでしょう。何百回だって、何万回だって。繰り返されるたびにきつと。

そしてやっぱり私は、海になるのよ。

潮風に身体がべたつくのだ。

イチルはム、と頬を膨らませながら砂浜の上でさんかく座りをして
いた。眼を見開いたときからイチルはそこから一步も動いていない。
本当はイチルも子どものように、さざなむ海へ裸足で駆け走りたか
ったがノアールの姿がどこかへ行ってしまったため、じっと我慢し
ているのだ。

急に放りだされた砂浜で手持ちぶさに砂浜に指を突き刺し、ぼう
っと柔らかい音を奏でながら引いては押し返す海を眺めていた。海
水泳ぐ魚さえ目視できるほど酷く澄んでいて、津波の白いあぶく
が砂浜に染みこんでは消えていく。

水色や緑色を混ぜたような、碧色の海。遠くにある濃紺がいわゆる
水平線というやつなのだろうか。ずさずさと砂浜に指をつっこむ。
砂浜の横には白い海へと続く階段があったがちらりと視線を一度向
けてからすぐさま興味なさそうに逸らした。

さざあんさざあん。

いったいどれくらい待ったのだろう。

「ノアールどこにいったのだったのだ」

その言葉と同時に今まで抑えていた感情がじわりと溢れて心臓がワ
シ掴まれたみたいで、ひゅと浅く息をすって胸元の服を掴む。

くしゃりと服に皺が寄ったが、イチルはじっと待ち続けた。

寂しい。心細い。置いてけぼり。ノアールが迷子。どこにいるの。

ここはどこ。私、捨てられてないよね。初仕事なのに。早くしないとガンドックに馬鹿にされちゃうよ、ねえノアール。はやく私をむかえにきて。

この思いは、子どもが親を慕うような純粋な好意なんだろうか。それとも、たんなる依存なのか。ううん、だって私いま見た目だけだけど五歳だもん。ノアールは保護者だもん。だから依存じゃないのだ。

ふるふると首を振って火照る身体のまま膝に顔を埋めてじっと耐えた。

心の中は不安で不安で仕方なかったがイチルにはノアールが迎えにくる確信があったからだ。科学的証拠を提示しろとかいわれてもできないけど、それでも。歪で気が狂いそうになった『星屑の街』で唯一イチルを見つけ出してくれた、そんなノアールだからイチルは待つのだ。早く、ノアールにぎゅってしてほしい。この焦燥感をどうにかしてほしい。

縫り付きたくなる思いを押しとどめて空をふいに見上げると晴れ渡った空だった。雲一つない快晴。じりじりと容赦なく私を焼け付ける太陽にくらくらして舌打ちしたいくらいだったが、それでも空を仰ぎ続けた。確かに眩しいし肌がひりひりして痛いけど。空の色が、ノアールの瞳の色だったから。ぱたんと砂浜に横になって身体全体を空へと映す。

「ここはよく人が行き倒れてるなあ。」

ざざん、と大きな漣がおしてきてイチルのブーツを濡らし、ふいに長い影が砂浜に広がって。はっと私は振り返ったけど、その先にいたのは待ち人じゃなかった。

その男の人がガンドックみたいな綺麗な金色の髪を太陽の下、煌々と輝かせてイチルを見下ろし眉尻を下げて呆れたように笑ったから、まるで童話の中の王子様みたいだとぼんやりと思った。その金色の瞳に懐かしさの色が滲んでいるのにふと気がついたけど、口を開く前にイチルは脳をぐちゃぐちゃに掻き回す鈍い痛みにそつと意識を奪われた。

人魚姫2

ふかふかぬくぬくさらさらふわふわ。

そんな擬音語が見事マッチするものに私は包まれているのを皮膚を通じて感じていた。採れたての綿みたいな、紡ぎたての絹みたいな。蚕は繭のなかこんな心地良さにくるまれているんだろうか。

すんと小さく鼻を鳴らすと太陽のにおいが広がった。きもちいいのに、

「あ、起きた？」

「！？」

急に繭が破られてイチルは眼を見開いた。

カツと眼を見開いたイチルに吃驚したのか少年はぎょっと勝気な顔を強張らせて椅子から落ちた。

いッてー！と腰をさすっている。なんなのだ、ここはいつたい。さつきまで砂浜で空を見上げていたというのに。

側頭部に手を当ててきよろきよろしているとすかさず少年が転げたまま現状を説明してくれた。若干不機嫌そうに口を尖らせつつだが。

「お前が急に眼え見開くからビビったじゃねえか！王子もいいかげん犬猫じゃねえんだから人間拾うのもたいがいにしろつつの！っ痛ええええ！」

「口さがないことをいうんじゃないわい、この悪ガキ」

仕切られたカーテンからのっそりと現れた老人に拳骨を貰った少年は腰の痛みから復活したばかりだった。ただろうにまた撃沈してしまった。

痛そう。あれ絶対たんこぶができているぞ。

そんなことをぼんやりと思っていると、呻き声をあげつつのたうち回る少年を後目に老人がイチルに手を伸ばした。

咄嗟に眼をつぶろうとしたが、伸ばされた手は酷くゆっくりしていて。

優しく前髪を払われたかと思ったらひんやりと冷たい温度がイチルのおでこに広がった。その冷たい温度で始めてイチルは身体が火照っていることに気がついて差し出されたグラスを受け取って縁に口をつけた。

無味無臭なお水。

くるくると冷たい水が食道を通って胃に落ちていくのがよく分かった。美味しい。

「まだちいとばかし暑いが安静にしとれば大丈夫じゃろ。おいティルト、嬢ちゃんを呼んでこい」

無心に水をちびちび飲むイチルから未だに伸びている少年に向かつて老人が声をかけてるといことはきつとティルトとはこの少年のことだろう。ここには私とおじいさんと少年の三人しかないし。

イチルの予想通り少年は立ち上がった。ぷるぷると拳が震えている。

ばつと顔をあげてティルトは老人の白い服を下から掴み上げて吠えた。

「人使い荒いんだよくそジジイ！」

「ふん、そんな糞の弟子であるティルトも充分糞じゃわい！それより早う行かんかつ」

「~~~~っ！」

老人の一喝にティルトはぐうつと口を閉ざしてきいっと睨みつけてくるりと身を翻して仕切りカーテンの外へ出て行った。ずんずんと言き場の失った怒りを宥めようとしたいるのかなんのかは分からなかったが足音荒く出て行ったティルトに老人は肩をすくめて、倒れた丸椅子を元に戻しそこに腰掛ける。

ぴくんと近すぎる距離に肩をはねさせる。

「そんな緊張せんでええ。僕は医者じゃ」

「・・・おいしやさん？」

「ああ。王子が海に行ったらお主が行き倒れていたらしくてな。まあ軽い熱中症じゃよ」

そういえば確かにおじいさんの服、お医者さんが着るようなのだ。だからティルトも同じのを着ていたのか。

じろじろと観察して合点がいったイチルはきよとんと傾げていた頭をふむと縦に頷き、伸ばされた掌に空になったグラスを手渡した。だいぶ身体の火照りが薄まってきたような気がする。身体が軽やかなのだ。イチルの顔色の変化に老人も笑った。

「だいぶ良くなったようじゃな」

「はい。わたしもそうおもいます」

小さいから呂律がうまく回らなくてしたっただけならなお礼になってしまつて恥ずかしさでイチルは顔を赤らめた。だから、敬語なんて使えないのだぞ。なのだとかの方が言いやすいのだ。

敬語を使うとなんにせよ微笑ましいとかいって笑われるけど！ノアルも別に敬語使わなくていいよって言っていたし。そ、そうだノアル！！

「せんせーはノアル知らない？ちゃぱつできれいな青いめのおとこの人！」

「茶髪で青い瞳？そういう人種は多いからの……。父親か？」

「ちちおや……」

ただ父親かどうか尋ねただけなのに、うんうんと唸り始めたイチルに老人こと先生は首を傾けた。父親じゃなかったら兄か。

唸り考え込んでいる少女は端からみてもまだ小さい子どもだ。そんな子どもが王家の土地であるあの砂浜まで一人でいけるはずがない。そうするとやはり偶然父が兄と迷い込んでそのまま逸れてしまったのだろうか。

王子の話では周囲に足跡はなくじつとして動かなかったようだし、足跡が風化するまで太陽のもと待ち続けていたらしい。こんな、幼子が、太陽の下で、熱中症になるまで！！なんて健気なんじゃつ。

じわりと老獪な瞳に熱いものがこみ上げ、小さな頭をよしよしと撫でた。どこぞの悪ガキと天と地ほどの差に爪の垢を煎じて飲ませてやりたいほどだった。だが、イチルに先生の思考など推測さえでき

るはずもなくじつと先生を見上げた。

もしや恥ずかしくて顔を赤らめたのが心配だったのだろうか。

「せんせー、わたしもう本当にだいじょうぶなのだ」

本当に大丈夫なのになぜか先生は手を止めて逆の手で自分の目蓋を覆った。ほんとにどうした。だれか説明してくれ。

「なにしてんだジジイ。そんな触診したことねえぞ、なんだセクハラってやつか？」

しゃつとレールが擦れる音とともにひょっこりと顔を出したテイルトに困ったような視線を送ると半眼で先生の腕をどけてくれた。中学生くらいなのにしっかりしている感動した。

「なんじゃテイルトもう帰ってきたのかつと、おお嬢ちゃん久しぶりじゃな」

振り返って嬉しそうな声をあげた先生にイチルもその先を見る。白と紺色を基調としたスカートのフリルが揺れて。イチルは瞳を輝かせた。

「び、びじんさんと・・・！」

ふわふわした長い茶色の髪になだらかな海の色みたいな青い瞳。熟れた桃色のようなふっくらした唇。困ったように下げられた眉すら美しい柳だった。び、びじんだー！！いやむしろ可愛いかもしれない

いけど。

ぱわんとなったイチルの瞳にはもはやメイドらしき彼女はもここの兎にしか映っていないかった。動物園にある触れ合いコーナーの隅で打ち震える兎さん。見上げる瞳は涙で潤み、近寄らないでくれと訴えかけるそんな・・・、

「いいではないか・・・！」

薄らと頬を赤ら熱い吐息とともに吐き出された。幼女に似つかわしくない恍惚な笑みを浮かべたイチルに思わずティルトは危なげななにかを無意識に感じ取った。なんか雰囲気が気持ち悪い。一歩下がる。

だが、師弟関係にある先生がイチルのあの笑顔に一番近いくせに身動きすらしなかったのが悔しくてまた一歩進む。一進一退ならぬ一退一進。

自尊心を取り戻しつつあった途中、肩に柔らかな手が柔らかな笑顔とともにティルトに向けられ彼女が横をさっと追い越した。

恍惚としていたイチルがベッドの上から彼女を見上げる。じっと瞳が交錯すること数秒でイチルが首をかしげた。

「なに？」

そう、彼女は一言すら発さなかったからだ。否、

「オケアは話せないんじゃないよ」

椅子に座ったままだこが疲れたように先生は言った。静まり返った
澱を散らさないようにゆつくりと、掬いあげて。話さないんじゃない
くて話せない。なるほどそれなら確かに沈黙のままでもおかしくな
いのだ。

うんうんと納得するイチルに続けるように先生は付け足した。

「喪失した記憶が甦れば声を出すこともできるじやろうに。こんな
気がきく娘っこなのになあ」

最後の方で声を震わせた先生は思わず顔を覆った。医者なのに救え
ない、そんなやり切れなさ。歳と共に刻んだ皺だらけの手に柔らか
い手が重ねられた。白くてきれいな手。

「悪いなあ嬢ちゃん」

ふるふると首を振る彼女、オケアに先生は眼を細めて立ち上がった。
んん、あれ、記憶喪失なのになんで名前は分かるのだ？

「きおくそうしつなのに、なんで名前はわかるのだ？」

不思議そうに見上げてくるイチルの額にもう一度手をあてて先生は
笑った。ほうれい線に皺が刻まれる。

「王子が付けてさしあげたんじゃ。そうそう、その王子からお主が
眼を覚ましたら嬢ちゃんが世話をするように御達しがきておってな。

嬢ちゃんに取り合えずついて行っておくれ」

ぼんぽんと優しく頭を撫でながらそう言った。いったいなんなのだ。王子って誰だ。そ、それよりもノアール！あやつ迷子ではあるまいな！！ムキー、いい歳こいてる大人なくせにいいいい！！

誰か一体どういうことか説明してほしい。ぐったりと肩を落としたイチルに先生が慌て出すがそれに構う暇は彼女にはなかった。

なぜなら扉の向こうは海でした状態からの熱中症ぶらす王子発言。そして、シャロンから貰った仕事についての資料もノアールが眼を通しただけでイチルのもとには何の情報もないのだ。

案内人のくせに案内してないじゃないか。先ほどまでは寂しくて仕方なかったが、冷静に考えてみるとノアールは非だらけだ。

むずりとそつぽを向きつつムカっ腹をたてる。

だけれども、足元が見えない状況はなにひとつ変わらなくてイチルを不安定にさせていることは間違いなかった。

ティルトに促されベッドからぴょんと飛び降りると足裏がひやつとした。裸足で石畳の上へ降りたから当たり前だった。

確かに冷たかったが、さきほどまで火照っていた残照がなだらかに冷たさを吸収してイチルの体を軽くさせたためなにかその場で足踏みをする。と、呆れたようなティルトが奥の方からスリッパらしきものを持ってきた。

「ほら早くはけよ」

冷たくて気持ちいいから要らないと言いたかったが、人前でひとりだけ裸足で歩き回っているのも惨めっぽくてイチルは渋々と足元に置かれたスリッパらしきものに足を通した。

見かけによらず軽く、爪先が少しだけ余るが歩くには支障がなさそうであった。こんな小さい足にあうのがよくあったものだなとイチルは関心すると同時に疑問に思ったが、きっとティルトのお古なんだろう。イチルはスリッパもどきに頓着することをやめた。あれだ、バレエシューズって思えば良いのだな。

先生たちに促されカーテンレールの向こう側に足を踏み出した瞬間、視界に飛び込んできた光景にイチルは顔を青く染め上げた。だって、だって。

すうっと肺一杯に空気を吸い込んで。

「お、おしろおおお！?!?」

だったのだから。

視線の先の大きな出窓の向こう。

童話に出てきそうな大きな城は吹き抜けた一陣の風に揺らぐことなくそびえ立っていた。

人魚姫3

とまあなんだかんだで王子様の御厚意によって城勤めを許された私は海で生き倒れていた仲間のオケアの仕事を手伝うようになった。

とかいいつつもイチルはその身の小ささも合間ってオケアの摘んだ花を持ったり、頼まれるお使いくらいしかできなかった。

カートを押したくとも重たくて腕がつるし、なにしろ背が低くて前が見えない。大量のシーツを運びたくとも許容量は流石に大人の半分以下だ。

「小さいっていやだなあ」

そう言って見下ろした手は、記憶よりもずっと小さい。

イチルは星屑の街で奪われたとはいえ歴とした大人だった。身の回りのことも己自身で事足りたし、余った手を他者に差し伸べることだってした。それなのに今となっては自分のことすらままならない。

なんでもできた自分を知っているから、今の状況がどうしてもイチルにとって齒がゆかった。

記憶と違って小さい手をぎゅ、と握り締める。

「??」

「なんでもないのだぞ」

足手まといでしようがない自分を嘲笑しそうになったが、休憩中食堂の隅っこで隣に座っていたオケアを見上げる前に。押し殺すように、隠すようにして息を整えてから顔を上げて笑った。

覗き込んでくる青色の瞳はそれでも不安そうに翳っているのが心苦しい。こんな美人に心配をかけてはならぬのだ！

海みたいな綺麗な青色の瞳を曇らせまいと息巻いて目の前のクッキーを口に放り込む。

途端に、さくつとふわつとバターの風味が口一杯に広まってへらつと笑ったイチルにようやくオケアも心配そうな面持ちを引っ込めた。

さくさくさくさくと軽やかな音を立てながら食べるイチルと、それを微笑ましげに見つ

めるオケア。どこからともなく花畑がみえる。

二人を隠れて見ていた人々はぼわんと頬を緩ませた。

クッキーを出してくれたシェフもお玉を片手にぼわんとしている。

実は今イチルとオケアのペアは城勤めの人々の隠れたアイドルなのだ。

声が出ないがそれでも美しく心配りに事欠かず柔らかく笑うオケアに、その後ろをとたとたついて行き、いじらしくも小さな頑張りを見せるイチルが微笑ましくて愛しかった。

子どもがいない男ですらそう思ったのだからいわんや他をやである。こうやってひっそりと、だが確実に広まった二人の話はとうとう王族の耳にも届くこととなった。

「二人ともいま大人気らしいね」

にこ、と笑ったきんきらのこの人は、イチルを拾ってくれた恩人であると同時にこの国の第二王子であるサーシャリオンである。本当はもつと長い名前だったけど忘れた。

奇しくもサーシャリオンにオケアも海で生き倒れていたところ救われたらしい。ティルトが犬猫云々とぼやいていた理由がようやくイチルは分かり「一国の王子なのに・・・」と呆れかえったが、サーシャリオンのそのお人好しさに救われたイチルは何も言えなかった。

「二人を独り占めしてしまつてなんだか臣下に申し訳ないね」

悪戯気に笑つて紅茶に手をつけたサーシャリオンを見てイチルは期待に満ちた目で注視する。

そうそう、オケア手製の紅茶を飲むと良い！そして褒めてあげるのだ。ぐつと手に汗握りつつそう祈る。

この度重なる御茶会は実はこの城に来てから一度や二度ではなくほぼ毎日開かれていたが、その中でイチルは気がついたことがあった。本人にも確かめた。伊達に歳は喰っていない。

「オケアが淹れてくれた紅茶はいつも美味しいね」

きらりと笑んだサーシャリオン殿下に、オケアの頬に朱が走る。そして、ちよつと俯いて恥ずかしそうに微笑む。小さくて愛らしい花がふわつと綻ぶような笑み。

正直言おう、くらつとする。女の私でもくらつとする。美人はなにをしても特だ。だが、くらくらしてる場合ではないのだ。私はキュ

ーピットになるのだぞ。

そう、イチルが気づいたことというのはオケアの恋心というやつだった。

「おいしかりう！このまひんもオケアとわたしとシェフの三人で今日つくったのだ！」「まひん？」

「・・・ま、まひいん」

「まひいん・・・？」

「まふいん、まひ、まひいん。・・・うつつしいのだ！まひんなのだぞリオン！見ればわかるだろう！！」

「うん、まひんだね」

「まひいんを食べるがよい」

胸を張ってお皿を、ん！と差し出すイチルをサーシャリオンはまひいんねと笑いながら手を伸ばした。嬉しそうに破顔するイチルに思わず気が緩む。

サーシャリオンは王族であるが、対等に渡り合うイチルを気にいつていたし、物言えぬオケアもまた信頼していた。

いつからかこの茶会が常に気を張り巡らせる自分が唯一肩を下ろせれる空間になっていたのに気がついたのは最近のことだ。この空間が心地よくて普段は「王族の義務」として咎めなくてはならないイチルの言動もあっさりと流してしまふようになってしまった。

とはいえ、サーシャリオンは王族としての自分の地位など気に止めぬ性格であつたのだが。

「まひん！まつひん、ま、まふいん・・・どうぞ」

未だに、「まひまふ」言うイチルに差し出された皿の上には大小さまざまなマフィンが飾られていたが、サーシャリオンは特段形が悪く歪なのを手取る。きつとこれはこの目の前にいる幼子を作ったのだらうと思いつつ。

「これが、イチルが作ったやつかな」

その瞬間、ぱちくりと大きな濡れ鳥の瞳を瞬かせたイチルにサーシャリオンは笑ってもう一つ摘み上げた。

「それでこれは、オケアだね」

「ななななんて分かるのだ!？」

かだと椅子から立ち上がって身を乗り出すイチルにサーシャリオンはひとつ笑顔を向けてから、新たな紅茶を淹れてくれていたオケアを見上げてそうだよね、と尋ねた。

尋ねるというにはその声には確信で溢れていたが。

オケアもやはり吃驚したのか少しの停止のあとこくこくと頷いた。イチルが誰がどのマフィンを作ったのか分かるように並べようと提案してきていたため、配置をオケアは覚えていたがそうでなければどのマフィンも同じにしか見えない筈だ。

なぜサーシャリオン殿下は分かるのだらうと小首を傾げると彼はくすりと笑うだけで教えてくれなかった。

だけど。

夜空に輝く星のように美しく零されたその笑顔だけで、オケアは泣

きたくなるくらいに胸が一杯になった。教えてくれない理不尽さや理由が分からない悔しさじゃない。

（ だって ）

今は最早失った声でそつとささやく。

鈴の鳴るような声と姉様たちに褒められた自分の声をなぞって。唇が柔らかく弧を描いた。

サーシャリオンの視界に入ることさえまならなかった『人魚姫』であつた自分が、今こつやつて彼の前に立っていられることが、気を抜いてしまえば泣いてしまいそうになるくらいに、

（ こんなことは奇跡よ ）

ただただ幸せで、愛おしくて、嬉しくて。

ずつとこつという毎日が続けばよいと、一つ、柔らかい微笑みがオケアの顔に浮かんだ。

執務に戻ったサーシャリオンの背を見送ったイチルは、にやあと口角を吊り上げたままオケアを見上げると、それはもう嬉しそうな瞳を向けられた。

暖かさと愛しさの中にほんの少しの切なさの色。ああ、もう本当にあれだなあ。

むふふ。

「こいする乙女のかおなのだ」

「っ！」

笑みを浮かべ、したり顔をしたイチルにオケアはパツと隠すように両手で顔を覆った。

うふふ、初々しい奴め、なに恥ずかしがらなくてもよいのだぞ！私が手ずから支援してやろうと笑みを深め胸を張ったが、オケアに恨まし気な眼でみられた。なぜなのだ。

さんざんからかい倒していたが途中でオケアが別の仕事に行ってしまった為にイチルはこの後はもうお役御免だ。仕方なく医務室にとぼと向かっていたが途中、見覚えのある背中に飛びついた。

文字通り、飛びついた。

「うゝ おっ！？」

「テイルトー！！」

「ちょ、おいこら絞めるなぐるじいイイー！！」

「・・・おお、これはすまぬ。だがはなさんっ」

「なに悟り開いたような顔して言っただよ！」

勢いを緩めることなく飛びつかれたテイルトは転げそうになるのを必死に踏ん張りぐるりと身体を回した。超動悸すんだけどと睨まれたが、うへへと笑ったイチルは背中になわしていた手を放しテイルトに話しかけた。

大きな皮袋のショルダーバッグを肩からかけている。普段は白い看護服を着ているのに。

「どこに行くのだ？」

「ったく。海だよ海。イチルこそ仕事はどうしたんだよ？」

申し訳なさをまるつきり出さず、けろりとしたイチルにティルトは何だか悟りを開いた気がしてショルダーバッグを掛け直し肩を竦めた。

そしてこう言つと絶対この小さな彼女も付いて来るだろうことも何となく予想もついていた。

「どうせお前も行くだろ。ほら来いよ」

「いく！」

予想どおりの元気の良い返事に苦笑を零すが気にした様子はイチルにはない。神経が図太いのかとズレだ思考に飛ぶ。が、イチル用にタオルを増やしたほうが良いだろうとの考えに至りすぐそこにある頭に手を乗せた。

「タオルとつてくるからお前は先に第三庭園のところで待つとけな」

「だ！」

「だ！つてなんだ、だ！つて」

ぼすぼすと頭を撫でて軽口を叩いたあと医務室の方に走って行ったティルトの背を見送ると近くにいた人々は気がつくとぼわんと和んでいた。ぼわんぼわん。

そして言われた通りに第三庭園に足を向けたイチルの側にわらわらと侍女が集まり結局ずらずらと集団で第三庭園に向かうこととなつ

た。

「ティルトくんもとうとうお兄ちゃんねえ」

「うふふ、兄妹みたいだったわね。」

にこにこ笑顔を浮かべる侍女から貰った飴玉をころころと口の中で転がしてイチルはきょとんと首を傾げた。

実は、ティルトとイチルのペアも城中のアイドルだったのである。

小さい頃から知っているティルトがより小さい子を甲斐甲斐しくお世話をしているのが大

層シヨタコ・・・、ならぬ年下の男の子に胸きゅんしてしまうお姉様方を虜にしているらしい。きゅんきゅんきゅん。と胸がなる音がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1585z/>

星屑の街

2012年1月8日20時52分発行